"原子核パスタ"と中性子星のクラスト

岡本 稔^{1,2} 丸山 敏毅² 矢花 一浩^{3,1} 巽 敏隆⁴

筑波大学大学院 数理物質科学研究科¹ 日本原子力研究開発機構 先端基礎研究センター² 筑波大学 計算科学研究センター³ 京都大学 理学研究科⁴

基研研究会『ハドロン物質の諸相と状態方程式 - 中性子星の観測に照らして - 』 京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館パナソニック国際交流ホール

2012年8月30日~9月1日

Menu

I. パスタ構造

II. Y_p固定の場合 (Y_p=0.5, 0.3, 0.1) III. β平衡下の場合 (中性子星クラスト物質) IV. 中性子星クラストの捩れとパスタ構造

V. まとめと今後

パスタ構造 = 一次相転移に伴う物質の非一様構造「構造を持った混合相」



Conventional Studies



相対論的平均場模型

$$L = \overline{\psi} (i\gamma^{\mu}\partial_{\mu} - m - g_{\sigma}\sigma - g_{\omega}\gamma^{\mu}\partial_{\mu} - g_{\rho}\gamma^{\mu}\tau^{a}\rho_{\mu}^{a})\psi$$

$$+ \frac{1}{2}\partial_{\mu}\sigma\partial^{\mu}\sigma - \frac{1}{2}m_{\sigma}^{2}\sigma^{2} + \frac{1}{3}bm_{\sigma}(g_{\sigma}\sigma)^{3} + \frac{1}{4}c(g_{\sigma}\sigma)^{3}$$

$$+ \frac{1}{2}m_{\omega}^{2}\omega_{\mu}\omega^{\mu} + \frac{1}{2}\left[\frac{1}{2}(\partial^{\mu}\omega^{\nu} - \partial^{\nu}\omega^{\mu})(\partial_{\mu}\omega_{\nu} - \partial_{\nu}\omega_{\mu})\right]$$

$$+ \frac{1}{2}m_{\rho}^{2}R_{\mu}R^{\mu} + \frac{1}{2}\left[\frac{1}{2}(\partial^{\mu}R^{\nu} - \partial^{\nu}R^{\mu})(\partial_{\mu}R_{\nu} - \partial_{\nu}R_{\mu})\right]$$

$$- \frac{1}{2}\left[\frac{1}{2}(\partial^{\mu}F^{\nu} - \partial^{\nu}F^{\mu})(\partial_{\mu}F_{\nu} - \partial_{\nu}F_{\mu})\right]$$
Thomas Fermi 近(4)
& %
Right product of the second second

$$-\nabla^{2}\sigma(\vec{r}) + m_{\sigma}^{2}\sigma(\vec{r})^{2} = -\frac{dU(\sigma)}{d\sigma} + g_{\sigma N}\left(\rho_{n}^{s}(\vec{r}) + \rho_{p}^{s}(\vec{r})\right)$$
$$-\nabla^{2}\omega_{0}(\vec{r}) + m_{\omega}^{2}\omega_{0}(\vec{r}) = g_{\omega N}\left(\rho_{p}(\vec{r}) + \rho_{n}(\vec{r})\right)$$
$$-\nabla^{2}R_{0}(\vec{r}) + m_{\rho}^{2}R_{0}(\vec{r}) = g_{\rho N}\left(\rho_{p}(\vec{r}) - \rho_{n}(\vec{r})\right)$$
$$\nabla^{2}V(\vec{r}) = 4\pi e^{2}\left(\rho_{p}(\vec{r}) + \rho_{e}(\vec{r})\right)$$
$$\mu_{p} = \mu_{B} - \mu_{e} + V = \upsilon_{p} + g_{\omega N}\omega_{0} + g_{\rho N}\rho_{0}$$
$$\mu_{n} = \mu_{B} = \upsilon_{n} + g_{\omega N}\omega_{0} - g_{\rho N}\rho_{0}$$
$$\rho_{e}(\vec{r}) = -\frac{\left(V(\vec{r}) - \mu_{e}\right)^{3}}{3\pi^{2}}$$

・パラメーター

有限核の性質と原子核物質の飽和密度等を再現するようにフィットさせる

PRC 72, 015802 (2005), T.Maruyama et. al



<u>Results: 陽子含有率 Y_p = Z/A 固定の場合 (A: 質量数, Z: 陽子数)</u>



Baryon Density [fm⁻³]



<u>陽子含有率固定の場合</u>:

・全て陽子含有率(0.5, 0.3, 0.1) において、典型的なパスタ構造の出現を確認出来た

•Y_p=0.1 において、中性子のドリップを確認した

・陽子分布において中心付近に凹みが現れる



・典型的なパスタ構造のみが基底状態として現れる



・グリッド幅 Δr ~ 1fm 程度では、パスタ構造の表面の立ち上がりをうまく再現出来ていない可能性がある

表面を少なくとも10数点、それ以上のグリッド点で表す為に、 Δr≦0.3 fm である事が求められる





・同じサイズのdroplet を "fcc", "bcc", "simple"のLattice に組むと仮定し、Coulomb エネルギーを比較
 → わずかに"bcc" がエネルギー的に有利



$$\rho \rightarrow 0$$

ρ≅0.01[fm⁻³] 付近で"bcc"と"fcc"の2つの結晶格子 に おける原子核がほぼ一致。 エネルギーにおいて差が現れるのはCoulomb 部分のみ



Coulomb エネルギーの小さい"bcc" が基底状態



- 確かにCoulomb エネルギーは"bcc"の方が小さい
- ・ 陽子含有率 : "bcc"よりも "fcc"の方が1割弱大きい
- ・ droplet の半径が異なる為、"fcc"は表面エネルギーで得をする



- 全てを統合すると"fcc"が有利

原子核内の陽子数

ρ_{B} [fm ⁻³]	0.002	0.006	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05
bcc	34.8	34.7	34.3	25.5	23.2	20.7	18.5
fcc	34.8	34.7	34.3	24.7	21.6	18.6	16.1

・ 基底状態の結晶格子は密度変化に伴い変化する

$$\begin{array}{c} \rho \to 0 & : \text{ "bcc"} \\ \rho \to \rho_0 & : \text{ "fcc"} \end{array}$$

中性子星クラストの捩れとパスタ構造の関係



- SGR 1806-20 B~8 × 10^{14} G : 18, 26, 30, 92.5, 150,626.5, 1837 Hz
- SGR 1900+14 B>4 × 10^{14} G : 28, 54, 84, 155 Hz
- SGR 0526-66 B~ 4×10^{14} G : 43 Hz
- ・パスタ構造(球状原子核)を考慮して、これらの 周波数へのアプローチがなされている

・重要な物理量: isotropic shear modulus μ → 現在用いられているのは



$$\mu = 0.1194 \frac{n_i (Ze)^2}{a} \begin{bmatrix} n_i : \langle \lambda \rangle \mathcal{O} \\ n_i = 1 / \left(\frac{4\pi}{3} a^3 \right) \end{bmatrix}$$

S. Ogata, S. Ichimaru (1990), TE. Strohmayer, et al. (1991)

・点粒子を仮定した分子動力学計算とモンテカルロシミュレーション
 → 原子核の有限サイズ効果、Coulomb screening 効果が含まれていない

鋭意計算中のβ平衡核物質のデータを用いて アプローチすることは可能か?



<u>今回の計算では...</u>

droplet を移動させた後に、"歪んだ"周期境界条件のもとで Baryon も中間子場も共に緩和させた





2次元のテスト計算において、原子核の移動・歪んだ周期境界条件の適用は上手くいっている模様



- b_{11} : 0.0212 (MD calculation) 0.0158 (our result)
- Hughto (2012) において、Coulomb screening の効果で 10%ほどのreductionがあるとされている
- それ以外からの影響(全てを緩和させた為(?)) により 以前の計算よりも25%程小さくなっている

<u>・まとめ</u>

低密度原子核物質に対して、相対論的平均場模型を用い、Wigner-Seitz cell 近似を 課さずに空間3次元の計算を行なった

> 3次元の計算において、

<u>Y</u>,固定の場合

既存のパスタ構造の出現が確認できた

基底状態として現れるのは典型的なパスタ構造のみ

<u>β平衡下の場合</u>

droplet ("fcc", "bcc"), rod の構造が基底状態として現れた 最もエネルギーが低い構造は、

 $\begin{array}{l} \rho \to \rho_0 & : \text{ droplet ("fcc") \& rod} \\ \rho \to 0 & : \text{ droplet ("bcc")} \end{array}$

▶ shear modulus を求める為の、テスト計算を行なった

<u>· 今後</u>

▶ 表面エネルギーの評価 (Thomas-Fermi 模型における Wg=Wc の様な関係は...)

▶ 有限温度への拡張

- ▶ 高密度原子核物質
- ▶ 力学的性質へのアプローチ
- 計算手法の改良

 $\left(W_g = F_0 \int d^3 r \left| \nabla \rho(\vec{r}) \right|^2 \right)$



END